

シンデレラはハッピーエ
ンド？

aoiruka

シンデレラはハッピーエンド？

六月のとある日。

梅雨の合間に現れた晴天。公園のベンチに一人の少女が座り、本を読んでいた。

「あら、こんな所で会うなんて、珍しいですね」

「陽鞠……」

少女は本から顔を上げて呼びかけてきた女性の名前を口にする。

「はい。こんにちわ」

陽鞠は笑顔で挨拶するが少女の返答はない。でも、いつものことなので陽鞠も気にせず話を進めていく。

「それで、こんな所で何を読んでいたのですか？」

「これよ」

「シンデレラ………何とか、非常にコメントが難しい物語を読んでいますね」

「別に陽鞠のために読んでいる訳じゃない」

「それもそうですね」

しばらくは少女が紙をめくる音しか聞こえない静かな時間が流れていた。そして、物語は閉じられた。

「ねえ、陽鞠。何か話してよ」

「いつながら唐突ですね。でもま、来ると思っていましたわ。テーマは、その手の中にあるシンデレラでよろしいでしょうか？」

「言葉が聞けるのなら、何だって良いわよ」

ぶっきらぼうに告げた。

陽鞠は小さく深呼吸し、「それでは」と前置きして語り出した。

「シンデレラ。日本のみならず、世界中で愛され読まれている物語ですね、この物語は本当にハッピーエンドだったのでしょうか？」

「何言ってるの。シンデレラって言えばハッピーエンドの代名詞みたいな話じゃない」

「それは大多数の意見でしかありません。あなたはシンデレラのどのような部分がハッピーエンドなのだと思いますか？」

「簡単じゃない。姑息な継母とその連れ子である姉達にずっと虐められてきたシンデレラが、ある日魔法の力で舞踏会に行き王子に出会う。その時は12時で魔法が切れるから別れるしかなかったけど、その後、王子様がシンデレラを迎えに来てくれて、二人は末永く幸せに暮らしました。本当、絵に描いたようなハッピーエンドじゃない」

「でも、本当にその後、王子とシンデレラの二人は幸せに暮らせたのでしょうか？」

陽鞠はそう言って、「シンデレラ」と書かれた物語を指さした。

「それは、継母と姉達に虐められることもなく、毎日大好きな王子様と一緒に平和に暮らせるようになったじゃない。それにお姫様になったのよ。貧しくない、裕福な生活を保障されたのよ。これを幸せと呼ばずに何というのよ」

「でも、その先の物語は何も書かれておりません。考えてみて下さい。何の取り柄もなく、継母

と姉達に虐められるしかなかった少女がいきなりお姫様になったのですよ。それって、役不足も良いところだと思いませんか？」

「役不足……」

「はい。そうです。お姫様とは何もせず、ただ美味しい食べ物を食べて、綺麗な洋服を着て、愛しい王子様と一緒にいることだけが仕事なのですか？ 違いますよね。あの物語の王国がどのような政治を行っていたのか私は知りません。そこまで詳しくシンデレラを読んだことはないのですから。でも、言えるのは何もせずに生きていけるほど世界は甘くない。もし、シンデレラが何もせずに裕福を満喫できるのならその国は遠くない未来に滅ぶことでしょう」

「働かざる者、喰うべからずって当たり前の事を言いたいのか？」

少女がちょっと幻滅したという表情を浮かべる。陽鞠に聞きたいのはそんな当たり前の言葉ではないのだ。

だが、言葉は続くいている。まるで、終わりなどないかのように。

「結論はそこでは無いですが、今言いたいのはまさにそう言うことです。では、お姫様になったシンデレラは、王宮での仕事があります。それにきっと社交場にもデビューしなければならないでしょうし、何より一国の姫です。跡取りを産まなければなりません」

「生々しい話ね。そんなことまで考えていると物語なんて、読めなくなるわよ」

「はい。だから、もう私は物語を殆ど読めなくなりました。まあ、これは関係のない事ですね。それで、継母と姉達に虐められていた無能なシンデレラは、はたしてお姫様としての公務を難なくこなせたでしょうか？ 国を背負う公務です。しがたい一軒家で掃除をしているのは訳が違うのです。周りからのプレッシャーに押しつぶされそうになるかもしれませんね」

そこで一息つき、少女を見た。少女はまた何か小言を挟んでくるかと思ったが、その気配はない。陽鞠は小さく息を吐き出し、続けた。

「社交場はどうでしょう。いきなり王子様とダンスを踊れたのだから才能は持っていたのかも知れませんね。でも、きっとシンデレラは妬まれるのでしょうね。何処の馬の骨とも分からない野良娘に、憧れの王子様の横を取られた。王子様が選んだからと言ってそれで納得するほど、女って賢い生き物ではないでしょう」

「そんな事、私に振られても困る。私は、まだ恋とかしたことがないからそーいうのよく分からない」

「若いのに、潤いのない青春ですね」

「うるさい！！ 早く話を続けなさいよ！！」

珍しく怒りの感情を露わにした少女に陽鞠は、してやったりと微笑み話を本題に戻した。

「人というのは、上に立てば立つほど残酷になることが出来ますと私は思っております。豊かであれば、残酷な世界と触れあう機会が少なくストッパーが働かないのでしょうかね。きっと社交場でシンデレラが受ける虐めは継母と姉達みたいに直接的ではなく、でもそれとは比較ならないほど、陰険で巧妙ないじめでしょう」

「そんなの、王子様が守ってくるわよ」

「ええ、そんなこと誰にだって分かります。だから、きっと巧妙に王子様に気づかれない方法で

シンデレラは虐められるのでしょうか。社交場に出ている貴婦人ですもの、きっと知恵もありますよ」

「そんなの……」

と少女は口を開いたが、それ以降の言葉は紡げなかった。

「そして、コレがもっとも難題でしょう。シンデレラは子供を宿さなければならない。こればかりは天の意志です。シンデレラではどうすることも出来ません。子供が宿ればハッピーエンドでしょうが、もし子供が宿らなければ、その先はきっと悲劇です。だって、子供を宿せないお姫様なんて、不要でしょう」

にっこりと、皮肉を顔一面に込めて陽鞠は笑った。

少女は笑い返せなかった。その代わりに、呟いた。

「陽鞠って夢がないわね」

「いえ。多分、夢がありすぎているのだと思います。故に、こうして考えてはならない物語のその先まで考えてしまっているのでしょうか。でも、だからこそなんでしょうね。シンデレラはパッピー・エンドだったのかもしれないと私は思います」

少女は目を見開いて、そして、陽鞠を睨み付けた。

「それって、あんた、今までの自分の発言を全てひっくり返す結論よ」

少女に睨み付けられても陽鞠は笑っていた。

「いえいえ。だからこそ、物語はあそこで終わるしかハッピーエンドにはならなかったのだと思います。シンデレラはハッピーエンドです。でも、それはあくまでシンデレラという少女の物語上の一点でしかない。私たちが知らない先でも幸せがずっと続くハッピーエンディングではないという所でしょうか。物語なんて何処から何処までを見るかで、見え方が変わってくるものです。あの物語がもう少しだけ語られていたら、きっとそれはシンデレラという何も出来ない少女が壊れていく悲劇になっていたのかもしれない。あくまで可能性のお話ではありますが、今日は、そんな捻くれたお話でした」

言葉は少女の中に流れ込んできた。

まるで、薬がすぐには効かないようにゆっくりと、だが、確実に陽鞠の言葉が少女の中に染み込んでいく。

陽鞠は語ることは全て終えたとばかりに黙り、少女は言葉が体にゆっくりと染み込んでいく快感を静かに感じていた。

沈黙は長くなかったのだと思う。二人とも時計をしておらず、時間の尺度を測る物を何も持っていないだったので、本当に感覚でしかないが。

少女はベンチから立ち上がり陽鞠にシンデレラの本を差し出した。

「これは何ですか？」

「今の言葉のお礼。貸してあげるわ。そして、陽鞠はもう少し明るい夢を見れるように自分を意識改造するべきよ。そんな考えじゃ、人生つまらないわよ」

「いいえ。人生は楽しいですわよ。だって、物語と違って、私が死ぬその時まで終わりなんてやってこないのですから。シンデレラとは違い、エンドマークをつけた部分でも終われない。これほど愉快で、楽しいことなんてありませんよ」

そう言って陽鞠は少女からシンデレラの本を受け取った。そして、今日初めて少女が勝ち誇った様な笑みを浮かべるのだった。

その意味が分からず、陽鞠は問い返そうとしたが、答えは先にやってきた。

「それじゃ、陽鞠。その本、市立図書館から借りてきたの。返却日は今日までだから、後はよろしくね」

陽鞠が一瞬言葉の真意まで理解しきれず、きょとんとした表情を浮かべた。その際に少女は陽鞠の前から走り去った。

残ったのは陽鞠と、その腕にある本日が返却日の本。

「終わらないというのは、こうして厄介ごとを抱え込んでいくことですね。全く、本当、愉快で、楽しいですわね」

そう言って、シンデレラの本を抱きしめ、終わらない自分の物語の中を、彼女は歩き続けた。